

企画調整員(ボランティア事業)*から ひとこと

2016年の大地震での被害が大きかったマナビ県ですが、自分たちも県も元気になるためにがんばるセプロカフェのような小規模起業家がたくさんいます。「新しい視点とそれに基づいた活動が刺激になる」と彼らが言うように、マナビ県に誇りを持つ起業家たちが小澤隊員とともに活動することで、さらにマナビ製品が広く知られるようになることを期待しています。



エクアドル事務所
石濱由実子

*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査し要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。



フェア(物産展)でセプロカフェのコーヒー豆を販売する小澤さん(左)。

JICA海外協力隊
がゆく Vol. 5

今回の協力隊員は、
コーヒー生産国、南米・エクアドルで
地域のコーヒー生産者と
ともに働いています。

in エクアドル
小澤健太

32歳
出身地:愛知県
職種:コミュニティ開発
任期:2017年7月~2019年7月



コーヒー生産者の
生活向上に
協力しています

+one information
バイレの輪に飛び込む

エクアドル人は内気な人が多く、思い描いていた陽気な南米人のイメージとは異なっていた。それでも、やはり南米なんだと思わせてくれる時があった。それがバイレ(ダンス)のフィエスタ(お祭り)だ。

配属されて3日後、ホストファミリーに連れられバイレに行った。会場となっていたのは、教会前の広場。たくさんの男女が音楽に合わせて揺れる光景は圧巻だった。しかし、踊り方のわからない僕は、実はあまり楽しくなかった。

音楽の種類によってステップが変わるのだが、どのステップがどの音楽に合っているのかわからない。同僚や近所の人に聞いても「よく聴いて」というアドバイスしか得られなかった。「クンビア・メレンゲ(なんじゃ、それ)?」とお手上げた。

それでも、何度も参加するうちにコツがつかめるようになった。ステップは簡単なので、音楽の種類を聴き分けてしまえば、あとはリズムに合わせるだけ。エクアドル人と一緒に踊っているうちに、彼らも実はそれほどリズム感がないこともわかった。恥ずかしがらずに楽しめばいい——それだけのことだった。

今では、音楽が鳴れば勝手に体が動いてしまうほどに。同僚たちとバイレを楽しむことで、親睦を深めることができた。恥ずかしさをふり切りバイレの輪に飛び込んでよかったと思っている。(小澤健太)



イラスト ● さかがわ成美



手作業で行われるコーヒー豆の収穫を体験。



セプロカフェの同僚と。

訪ねてきたことがありました。自分の活動でセプロカフェの魅力がアメリカまで伝わったことがうれしく、エクアドル人の同僚と変わらずハイタッチしてしまいました。日々の活動はともゆつたりしていて、活動というより生産者たちと一緒に生活していると言ったほうがしっくりきます。エクアドルではみんな、家族のために働き、幸せになるために働いています。彼らを見ていると、日本で考えていた「何のために働いているんだろう?」という問いの答えに近づいている気がします。

赤道直下、標高5000メートルを超えるアンデス山脈の麓で栽培されるコーヒーはエクアドルの主要な輸出品です。国内にはいくつかがコーヒーの産地があり、そのひとつであるマナビ県のコーヒー生産農家の組合「セプロカフェ」が僕の活動現場です。セプロカフェでは、これまで組合の農家から皮むきまで終わった

コーヒー豆を買い取り、ほかの会社で販売していました。しかしそれは価格が安く、生産者の生活が向上しないため、組合は生豆の精製、包装、輸出まで行うことを希望。それが軌道にのるようお手伝いをしています。

エクアドルに来て1年9か月が過ぎ、自分の取り組みが少しずつ形になってきたと感じています。これまでに行ってきたのは、組合ブランドコーヒーの最終製品(焙煎まで行ったもの)に向けた準備パッケージデザイン、製品紹介ホームページの作成・管理、中国での展示会やアメリカでの販売に向けての準備など。コーヒー豆の生産や輸出の知識はエクアドルに来てから学んで得たものばかりですが、日々の仕事には会社員時代に培ったプロジェクト管理能力や調整力、そして対人交渉力が役に立っています。実はエクアドル人は新しく知り合いをつくるのが苦手なようです。そんなときは僕が間に入り、他地域のコーヒー生産者と経験を共有してもらいます。それによって農家の人たちがより広い視野を持ち、仕事へのモチベーションを高めることができているのではないかと思います。